

『農と食』 北の大地から

連載第 209 回

追悼 足寄町の放牧酪農家
吉川友二さんの人生を辿る

北海道の放牧酪農のリーダー的存在だった十勝管内足寄町の吉川友二さん(1964年、長野県生まれ)が昨年11月25日、59歳の若さで逝去した。23年秋に膀胱癌と診断されて闘病生活を送っていたが、旅立つ直前まで多くの人たちと語り、放牧酪農やアニマルウェルフェア(家畜福祉・AW)のあり方などについて発信し続けた。「家畜との良い関係を築き上げるためには、ストックマンシップ(牧夫精神)が必要」、「日本のAW問題を解決するには、*畜産の現状をしっかりと伝えること*食品表示義務の徹底*義務教育の段階で食育を取り入れる*……。青春時代に抱いた「自然保護のような仕事をしたい」との夢を放牧酪農を通じて実現させた人生から、わたしたちが学ぶことは多い。



▲「ありがとう牧場」の生乳を使い本間幸雄さんが製造したチーズは、国内外のコンテストで受賞を重ねている
◀傾斜地が多い草地は牛たちと人間との共同作業で今日の姿に

種を蒔き道筋をつけた放牧酪農 牛の偉大さを尊ぶ牧夫精神とは

『牛が耕す牧場』に触発されて
ニュージールランドで酪農実習へ

昨年10月5日、NPO法人さつぽろ自由学校「遊」で企画した、「ありがとう牧場」の見学会が吉川友二さんと直接話す最後になった。当日は、放牧地や夕方の搾乳に戻る牛たちの様子などを観察。懇談の場では「アニマルウェルフェア(AW)とス

トックマンシップ」と題した数枚のレジュメが配られ、参加者との意見交換も行なっている。

吉川さんは2023年秋に膀胱癌が見つかり、余命宣告を受けた。その直後にバリ島へ自転車旅行に出向き、昨年は知己の牧場などを訪問するなど精神的に動いた(拙宅にも来てくれた)。精神的に落ち込んだ様子を窺わせなかったのは、心身とも

に強い人ゆえだろう。

この見学会から間もなく容体が悪化して入院し、病床で前出のレジュメをベースにした長文の論考(後述)を書き上げる。いったん退院したが、11月25日夜、帰らぬ人になった。放牧酪農のみならず、AWの実践面でも期待した人物だっただけに、早すぎる旅立ちが残念でならない。

*

酪農との出会いだった。「穀物を与えず出来る酪農があるんだ」。友人宅でニュージールランド(NZ)酪農を紹介した本を目にして、「やるなら、これだ!」と直感。著者に手紙を書き、現場で放牧酪農を学ぼうと29歳で同国に渡る。

ここでは20歳の若者が2百頭の牛の飼養を手がけていた。NZ生活は4年間におよび、吉川さん自身も160頭規模の牧場を任された。

実習中に視察に訪れた足寄町の放牧酪農家・佐藤智好さんとの出会いがきっかけになり、帰国した吉川さんは2000年に現在地での新規就農を実現する。86ヘクタールの土地を取得し、季節分婉による酪農経営をスタート。酪農家としては広い牧場で人手もいるため、当初から研修・実習生を積極的に受け入れた。「ありがとう牧場」で放牧酪農を学んだ数十人もの若手が全道各地で新規就農しているという。

**足寄町に就農してリーダー格に
家畜を扱う人間としての心構え**

わたしが初めて吉川さんと出会ったのは、2003年夏の「放牧酪農ネットワーク交流会」の一環で、牧

場を見学した時にさかのぼる。同年秋には、吉川さん夫婦も参加する「足寄町放牧酪農研究会」の活動取材しており、本シリーズの第18回(04年2月号)で紹介した。

2012年7月号には「新規就農をサポートする取り組み」の中で、40代後半になった吉川さんの話が登場する。このころは、100頭近い乳牛(うち経産牛は50頭ほど)を飼い、季節繁殖も軌道に乗っていた。「2千7百万円の借金を返済し、あと1年経つと毎年170万円ずつの土地代を返すだけになる」とあるから、優良経営そのものだ。地域のリーダーとして活躍し、放牧研究会の第2代会長も務めていた。

この年には、ファームイン(農家民宿)の部屋も併設した住宅やチーズ工房も造った。拙記事では、「日本では、草を食べる牛に穀物を与え、牛を豚化させる飼いやしている。これでは酪農家には儲けがありません。『今の飼いやは間違っている!』と消費者に発信し、草を食べさせる酪農にソフトランディングさせていきたい。(略)これからは、『足寄に行けば農家チーズが食べられる』という町にしたい」



夕方になり、ミルクパーラーに向かう牛たちを見守る吉川友二さん(2020年7月)



レジュメを元に「家畜福祉とストックマンシップ」について語る
(右端・昨年10月5日)

「AWの問題は、消費者側は動物の福祉を良くするように言いながら、少しでも安価な畜産物を要求することによって引き起こされる。生産者側は動物の福祉を犠牲にしても、需要に応えるため安易な方法(工業型の畜産)で生産量を増やすことを求められる。日本の場合は『生産者は大規模化をしないと生き残れない』と指導されて規模を拡大し工業化し

という吉川さんの思いも紹介した。この構想は「ありがとう牧場」の草の牛乳にほれ込んだ本間幸雄さん(81年、長野県生まれ)が13年、牧場の近くに「しあわせチーズ工房」を開設して実を結ぶ。近年では、本間さんの製品が国内外のコンテストで最高賞を受賞するなど知名度が高まり、「ありがとう牧場」の生乳を使ったチーズのファンも増えた。

放牧は、動物本来の習性や生理生態に合う飼養方法であり、乳牛のアニマルウェルフェアを実現していく近道ともいえる。



新規就農から日が浅いころ、視察に訪れた人たちに説明する吉川さん(2003年夏)

わたしは近年まで、放牧とAWをめぐって吉川さんから突っ込んだ話を聴く機会がなかった。そこで、コロナ禍のさなかの20年夏、このテーマについてインタビュース、同年10・11月号で紹介している。

吉川さんはこの時、NZ時代をふり返りながら、「ストックマンシップ」の大切さを強調した。日本人には耳慣れない言葉だが、「家畜を扱う人間としての規範や心構え」を意味するという。わたしは、「牧夫精神」と意識している。

「舎飼いの『介護酪農』をすると、牛に対する尊敬の念が湧いてきません。この素晴らしい動物は、放牧してみないとその偉大さが分からない。放牧した牛には生態系を変える力があり、強力なパワーを持つ植物を踏み倒して食べ、牧草地に作り替えてしまう。すごいことだと思えます。」

(新規就農時には)草地は耕作放棄地と化し、鬱蒼とした萩原になっていた。そこに牛を放牧すると根っこが踏まれ、萩は枯れてしまった。その光景を見て、僕は牛の偉大さを感じるようになった」

などと、みずからの体験をもとに放牧酪農の大きな可能性を語った。

ている。アメリカの穀物戦略にまだに洗脳されている面も大きい」

こう分析した上で、問題を解決するために酪農・畜産の実態を知ってもらうことの大切さを説く。そして、酪農産業に関わるすべての人たちが、国や農協、乳業メーカー、乳牛の改良団体、農業普及員らが、消費者や納税者から「こんな酪農ならば日本にはいらぬ」と言われる前に畜産業を変えよう、と提案している。

ニュージランドで出会ったコンサルタントから、「牛を飼うにはストックマンシップが大切。牛を家族だと思つて接するんだよ」と言われたことをふり返りながら、屠場への輸送方法や屠殺のあり方などについても言及する。

「ストックマンシップ(牧夫精神)とは家畜に対する尊敬である」

「放牧をして初めて、牛の本当の偉大さを感じ、知ることが出来る」

「牛たちは大地を踏みしめ、糞尿を大地に還し、草地という生態系を新たに作り出す。この自然の循環の軌跡を感じるようになると、自然の中で働く楽しさも生まれる」

と述べ、家畜との絆や畜産の魅力、現場で起るAWの問題について解



逝去から50日ほど前、さつぽろ自由学校「遊」の見学会で放牧酪農について解説(昨年10月5日)

狂牛病(BSE)が大発生したころイギリスで暮らしていた知己の酪農家の娘さんが、殺処分される牛たちを思つて涙を流す人々を見た——という話を紹介してくれた吉川さんは、こう強調した。

「小学生のころから『社会にとつて何が大事か?』をきちんと考えないと(放牧やAWに対する見方は)変わっていきません。トレーに入ったお肉しか見たことがない都会の人たちと、牛の偉大さが分かる人との橋渡しをしていくことが必要です」

消費者との架け橋になれる人材を

説していく——このあたりは放牧酪農やAWを実践しようとする人々への遺言ともいえるだろう。

日本でAWが広がらない理由として、吉川さんは「消費者と生産現場が隔絶されていること」「畜産食品の表示義務がほとんどないこと」のふたつを挙げ、これらの解決方法として次の3点を提案している。

- ① 畜産の現状をしっかりと伝えていくこと
- ② 食品表示義務の徹底
- ③ 義務教育の段階で食育を取り入れる。AWや環境を意識して毎日の



真冬の「ありがとう牧場」。牛たちは屋外でたくましく生きる

つくる——そのためにも、放牧のプロフェッショナルを育てる「放牧の学校」をボランティアでやっていたい、とも語った。

余命宣告から間もないころ、吉川さんに「放牧学校を創る仕事が残っているね」と言うと、「治療して、癌サバイバーになれたら、やりますよ」との答えが返った。残念ながら、その夢を実現させることは叶わなくなりました。

NZでの牧夫経験や足寄町での営みにアニマルウェルフェアの実践や消費者とのつながりが加わると、新たな「農と食」を推進していく大きな力になるのではないかと。そう考えたわたしは、さつぽろ自由学校「遊」のAW連続講座の講師をお願いしたり、関連企画の告知などを通して、吉川さんと連絡を取り合っていました。しかし病気には勝てず、志半ばで逝ってしまった。

「家畜に対する尊敬を」が持論 遺稿になったAWをめぐる論考

わたしたちが牧場見学に訪れてから1カ月後、「アニマルウェルフェア」とストックマンシップ」と題する論考が送られてきた。病床でパソコン

食を選んでもらう

また、工場型畜産が引き起こす問題はAWだけではなく、草食動物に大量の穀物を与えることで食料需給上のリスクになり、飢餓人口を増やすと問いかける。「牛は牛らしく、人は人らしく」のファーマーズウェルフェアが大切であり、正しい放牧は経営を良くしてくれるとも。

スイスの酪農家の平均は面積26ヘクタール、搾乳牛25頭という。これをお手本にして、「地方の風土の特色を生み出すために、

※外国産の穀物や石油など外部資材にできるだけ頼らない

※何百年も価値を失わない豊かな農家住宅と牛舎を建てる

※農家人口を増やすために最小・適正規模の酪農をめざしていくと文章を締めくくっている。

放牧酪農に懸けた吉川さんの歩みと、牛たちを尊敬する牧夫精神に教えられることは多い。その軌跡に学びつつ取材活動を続けたい。合掌 ■「アニマルウェルフェアとストックマンシップ」の全文は、ありがとう牧場HPの「吉川文学」コーナーに掲載済み。ご一読ください。
<https://arifarm.net/book/>

※筆者のHP「滝川康治の見聞録」<https://takikawa-essay.com/> に本シリーズの過去記事を収録しています。ご参照ください。